

特集にあたって

豊かに生きられる社会の未来図を、
それぞれの地域で描くために

新田國夫 Nitta Kunio (日本在宅ケアアライアンス議長)

20世紀の時代は、経済・医療構造・市民社会・個人史のすべてにおいて変遷を余儀なくされてきました。

20世紀型社会は近代国家を形成し、近代国家は家族を中心とした市民社会を基本とし、都市・地方が形成されてきました。高齢少子世界は、20世紀型近代国家の土台から組み換えを求められる構造になっています。家族は超核家族化し、高齢者世帯・単独世帯が主流となる世界です。衣食住の基本である住宅政策は家族を中心とした政策が主流を占めており、独居でも住むことが可能な新しい地域社会の基本構造を確立する必要があります。

まず基本となるのは、家族・本人の20世紀社会からの意識の変移です。20世紀型社会は10代から60代までの現役世帯の価値観から成立していますが、50歳以上の年齢の方が50%を超える時代になる今後の社会においては、人生の転換が必要になります。これからの社会における人生の転換とは、就業後・定年後の人生が要介護の生活になったり、人生の最終段階を単に生きる日々として過ごすのではなく、医療モデルからの脱却と、いかに豊かに生きるかが問われることをさします。

医療の問題からの脱却は、医療・介護の一体的提供が必然ですが、そのモデルは一元的ではなく多様なモデルが構想されます。モデルには地域性がみられますが、都市型モデルのなかにもまた多様性があり、その規模にも多様性があります。人口減少社会のなかでの地方モデルにもさまざまなモデルがすでに存在しますが、さらなる進化が求められます。いずれのモデルでも、在宅医療が基盤として位置づけられることは、社会性・経済性・制度上の問題のみではなく、新しい世紀の豊かに生きることを基本とした戦略の延長線上だと考えることができます。

高齢期になると、その生はさまざまな転機を迎えます。この課題は、病院医療とかかわりを持ちます。現状として存在している病院の形ではなく、その時代にふさわしい機能としての病院の在り方が、これからの社会では問われます。医療の規範的統合は、在宅医療においても、病院においても、社会の構造変化に応じて変わっていくことが求められます。それぞれの医療の在り方も含めての議論は、重要な課題です。

これからの地域を考えるには、地域を多様な“面”ととらえ、そこに個人の生き方の“縦軸”が交差すると考えて描く総合図が求められています。それぞれの立場から、総合図のさまざまな位置において求められる未来図を描き、指標にすべく、本特集を企画した次第です。